

# 待兼山俳句会

第七百三回

世話人

山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子  
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和七年八月十八日（月）

会場 大阪倶楽部 会議室 締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・東野太美子  
向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者

上田恵子・碓井遊子・小出堯子・西條かな子・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・根来眞知子  
平井瑛三・東中 乱 以上出席者九名＋投句者十名 計十九名

兼題

文月・芭蕉（幹三） 線香花火（手花火）・新涼（暁子） 当季雑詠 通じて八句

次回

例会 令和七年九月二十二日（第四月曜日）会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時  
兼題 蟋蟀・コスモス（幹三） 秋茄子・秋簾（暁子） その他当季雑詠

次々回

令和七年十月二十日（第三月曜日）

選者吟

筆跡のやうな雲ある文月かな

幹三

新涼や手を丸くして掬ふ水

飛び石を飛びゆく先に涼新た

新涼や会ふ人ごとにそのことを

暁子

横顔を覗く花火の明滅に

幾艘も船出すること芭蕉の葉

### 幹三 選

新涼の心地に選ぶハーブティー

◎雨音のはつきりしたる芭蕉かな

◎芭蕉葉の夜は人影のごと窓に

手花火の柳のしだれ黙の時

◎新涼や会ふ人ごとにそのことを

文月や星それぞれにもの言うて

◎釣糸の雫に宿る秋涼し

新涼や手にする野菜つややかに

文月の郵便受に親しき字

八月の海きつぱりと空分かつ

◎庭花火幼き指の賑やかに

◎手花火の終はり波音復活す

芭蕉葉を滑る雫の早きこと

筆太き書家の円相文月なる

幾艘も船出すること芭蕉の葉

横顔を覗く花火の明滅に

寛容であれと古刹の大芭蕉

手花火は闇と夜風の仲間なる

文月の古本まつり森の蔭

太美子

邦夫

暁子

眞知子

暁子

安廣

安廣

眞知子

輝子

太美子

遊子

翠

安廣

兵十郎

暁子

暁子

太美子

邦夫

乱

雨風に青々揺るる文月の樹

◎祖母のゐて芭蕉の茂る家なりし

芭蕉葉の厚き緑に添ひし風

起きてまず熱き茶を淹れ涼新た

涼新た朝よりひびく杖と下駄

新涼や糊のききたるシャツを着る

芭蕉葉の傷みやすきを愛すかな

輪になつて引く手差す手の盆踊り

書く能力奪ひし病文月来る

邦夫

輝子

兵十郎

かな子

邦夫

安廣

暁子

盛雄

翠

### 幹三 特選句講評

・雨音のはつきりしたる芭蕉かな

邦夫

初秋の芭蕉葉の質感が伝わって来る句。音や涼しさに加えて独特の緑色も見えて来ます。この後秋風が吹きその葉も裂け始めてくるのです。

・芭蕉葉の夜は人影のごと窓に

暁子

芭蕉の葉は大きさや形に加えて、その揺れ方に妖しいものを感じます。どこか淋しく、孤高を感じさせるところもあり、「夜は人影」という措辞にうなずけます。

・新涼や会ふ人ごとにそのことを

暁子

猛暑が続くがふと朝晩に感じた一縷の涼しさ、そのことを自分で納得するためにも、人に話したいという気持ちです。秋の人恋しさも感じる句。

・釣糸の雫に宿る秋涼し

安廣

細い糸に付着した一粒の水滴に季節の変り目が見えた。俳人の目がよく効いている一句です。釣りの風景の想像もでき、新涼の雰囲気がよく出ています。

・庭花火幼き指の賑やかに

遊子

秋の夜の花火の楽しさが描かれました。「指の賑やかに」という措辞が新鮮。色とりどりの花火の光や、子どもたちの動きも見えてきます。

・手花火の終はり波音復活す

翠

花火の終わった後の「闇」はよく描かれますが、この句は「音」で表現。海の近くでの花火遊びの景が見えます。「復活」は硬いので「聞こえけり」でも十分伝わると思えます。

・祖母のゐて芭蕉の茂る家なりし

輝子

まるで水彩絵の具でさっと描かれたような淡白な句であ

る故に、庭の広さ、家の様子、祖母の暮しなど大きな想像の余白が読者に残されました。今回特選に選んだ句にはどれも余白があります。十七文字の詩は余白が要と思います。

## 暁子 選

◎故郷に人を訪ぬる文月かな

邦夫

新涼や窓開け放ち深呼吸

瑛三

闇の底芭蕉葉揺れて魔の気配

安廣

ケロイドの師は黙したり原爆忌

遊子

実樺のつやつや丸く育つ日々

輝子

峡谷の瀬音かすかや秋涼し

兵十郎

◎後悔と慚愧の文月今年また

眞知子

新涼のかけらさへなし特攻碑

翠

雨音のはつきりしたる芭蕉かな

邦夫

文月の古本まつり森の蔭

乱

◎新涼や手を丸くして掬ふ水

幹三

祖母のゐて芭蕉の茂る家なりし

輝子

水求むごと枯山水の赤蜻蛉

遊子

揺らぎたる芭蕉葉見上げ本堂へ

邦夫

読み書きをスマホで済ます文月かな

我が庭に芭蕉あればと思ふ夕

全きも千々に裂くるも芭蕉なり

文月に再度ひもとく赤毛のアン

手花火を終へさよならのさみしさよ

芭蕉葉を滑る雫の早きこと

◎文月や遺品となりし見舞状

筆跡のやうな雲ある文月かな

◎秋暑きそれでも出向くゴッホ展

新涼や手にする野菜つややかに

飛び石を飛びゆく先に涼新た

◎文月や文読み返す動けぬ身

書く能力奪ひし病文月来る

文月の郵便受に親しき字

翠

朱美

乱

朱美

かな子

安廣

恵子

幹三

茉衣

眞知子

幹三

恵子

翠

輝子

## 暁子 特選句講評

・故郷に人を訪ぬる文月かな

邦夫

文月は陰暦七月、陽暦では八月。お盆の月であるからお墓参りなどを兼ねて故郷へ帰られる方が多いだろう。もしかするともうご実家はないのかもしれない。しかし訪ねた人がある。文月という難しい季語が生かされている。

・後悔と慚愧の文月今年また

眞知子

この句も文月ならではの句。戦争体験者は毎年文月が来るとこの思いを繰り返す。

・新涼や手を丸くして掬ふ水

幹三

新涼の候の水、いかにも涼し気である。山あいの谷川だろうか、それとも日々の水道の水だろうか。中七で掬う様子を活写。

・文月や遺品となりし見舞状

恵子

この句は作者の受け取られた見舞状が、差出人の遺品となったということだろうか。差出人は当時お元気だったのか、あるいは病んでおられたのか。そぞろ身に沁む句。

・秋暑きそれでも出向くゴッホ展

茉衣

上五「秋暑し」で切る方がよいか？これこそ本当のフアン。季語とゴッホが合っているような気がする。

・文月や文読み返す動けぬ身

恵子

作者は足を傷められたとか。気になる文の内容かもしれないが、動けぬ身ゆえにどうすることもできない。あるいは作者を慰める文だったかもしれない。文月と文、韻をふんでいる。今回このように文月という月の名を、文（便り、文字）や書物と結び付けられた句がいくつかあり、皆様の工夫が思われた。

### 互選三句

朱美選

文月や芭蕉はいよよ越後路に

遊子

新涼の風に育つや旅心

暁子

ケロイドの師は黙したり原爆忌

遊子

原爆を体験した人たちと同じ気持ちになれる私たち世代。

### 瑛三選

秋暑きそれでも出向くゴッホ展

茉衣

飛び石を飛びゆく先に涼新た

幹三

釣糸の雫に宿る秋涼し

安廣

新鮮な発見。見事な感性。

### 和江選

新涼や会ふ人ごとにそのことを

暁子

めぐりくる終戦の日夾竹桃

茉衣

全きも千々に裂くるも芭蕉なり

乱

風に遊ぶ芭蕉の様子を想像します。

### かな子選

新涼や会ふ人ごとにそのことを

暁子

文月や小学生の書く平和

兵十郎

秋涼し曾孫元氣にお食ひ初め

瑛三

爽やかに、そして人をほっこり幸せにする句。

### 邦夫選

手花火の火玉ぽとんと落ちにけり

盛雄

芭蕉葉の割れ目ひと筋鐘の音

兵十郎

庭下駄の素足に添うて涼新た

輝子

秋の涼しさを先ず下駄を履く素足が感じ取るとは巧み。

恵子選

芭蕉葉の割れ目ひと筋鐘の音  
手花火やをとめわらはのちひさき手  
破芭蕉教会主は好好爺  
この教会に行けたらお話させていただきたいです。

兵十郎

邦夫

かな子

堯子選

寛容であれと古刹の大芭蕉  
文月や小学生の書く平和  
達筆の朱に偲ぶ師や文月来る  
書道を習う場面を「朱」という一文字で表現されたこと。

太美子

兵十郎

輝子

太美子選

筆跡のやうな雲ある文月かな  
書く能力奪ひし病文月来る  
庭下駄の素足に添うて涼新た  
今朝は素足に庭下駄が心地よい。作者の感覚は鋭い。

幹三

翠

輝子

輝子選

新涼や会ふ人ごとにそのことを  
飛び石を飛びゆく先に涼新た  
新涼や手を丸くして掬ふ水  
新涼の水を掬う喜び。手を丸くするという措辞がいい。

暁子

幹三

幹三

兵十郎選

庭下駄の素足に添うて涼新た  
手花火は闇と夜風の仲間なる  
新涼のかけらさへなし特攻碑  
特攻の碑に新涼の欠片も無いのは悲しい事実で同感。

輝子

邦夫

翠

茉衣選

八月の海きっぱりと空分つ  
文月の古本まつり森の蔭  
海望む古刹に破れ芭蕉かな  
寂れた寺と枯れた芭蕉葉を広い海が生き返らせる。

太美子

乱

遊子

眞知子

新涼や五百羅漢のさんざめく  
夕風にふと新涼のうす衣  
文月や小学生の書く平和  
平和を唱えながら空しく過ぎて行く文月、今年又。

盛雄

太美子

兵十郎

翠選

雨音のはつきりしたる芭蕉かな  
芭蕉葉の夜は人影のごと窓に  
筆跡のやうな雲ある文月かな  
筆跡のやうな雲、私も一度見てみたい。

邦夫

暁子

幹三

盛雄選

ひりひりと火の散る線香花火かな

幹三

新涼の風に育つや旅心

暁子

釣糸の雫に宿る秋涼し

安廣

「雫に宿る」が涼しくなった秋の風情を伝えて佳い。

安廣選

新涼のかげらさへなし特攻碑

翠

筆太き書家の円相文月なる

兵十郎

実椿の大きさをぼんと海へ投ぐ

兵十郎

椿の実の大きさを重さが掌に実感として感じられる。

遊子選

新涼や剃刀を研ぐなめし皮

幹三

文月や書きかけたままの恋の文

かな子

筆太き書家の円相文月なる

兵十郎

文月七夕の日に恋文や円相の書を供えるのも麗しい。

乱選

祖母のゐて芭蕉の茂る家なりし

輝子

庭下駄の素足に添うて涼新た

輝子

芭蕉葉の夜は人影のごと窓に

暁子

夜の大きな芭蕉の葉を窓辺の人影と見た。

参加者自選句

手花火の柳のしだれ黙の時

眞知子

文月や芭蕉はいよよ越後路に

遊子

文月や一筆書きの箋送る

盛雄

新涼の淵に繰り出す鵜飼船

朱美

手花火に果つる華やぎ我が身にも

和江

手花火に闇遠のきて子らの顔

堯子

破芭蕉教会主は好好爺

かな子

友逝きて線香花火ぼたり落つ

恵子

文月や文机ぼつんと部屋の間

瑛三

新涼や糊のききたるシャツを着る

安廣

新涼を待ち侘びている街の空

茉衣

故郷に人を訪ぬる文月かな

邦夫

庭下駄の素足に添うて涼新た

輝子

八月の海きつぱりと空分かつ

太美子

読み書きをスマホで済ます文月かな

翠

全きも千々に裂くるも芭蕉なり

乱

筆太き書家の円相文月なる

兵十郎

## 即吟

今日は、それぞれやむを得ない事情で欠席された方が多く、いつもよりこぢんまりした句会になりました。席題は二つ。一つは艶々した葉を付けた椿の枝に、大きなまだ青い実。もう一つは桔梗です。長旅で萎れていましたが、句会の終盤、即吟の時間には見事に復活、美しい花を見せてくれました。時間の都合で、披露なしになりました。

刻々と紫深む桔梗かな

暁子

花瓶より垂るるでつかき椿の実

邦夫

大いなる花咲く期待椿の実

太美子

一輪の桔梗や壺によりがへる

輝子

水を得て上向く勢青桔梗

兵十郎

白桔梗酷暑に凜と挑むなり

茉衣

実椿に椿の赤さのこりをり

幹三

大きな事恥じるや句座の実椿よ

翠

夕されば句座に桔梗の濃紫

安廣

## ひとこと

山田安廣

「暑い」という言葉を聞かない事の無い毎日でございます。

互選3句の投稿要領についてお願いを致しました所、多くの方が新しい形でお送り頂いております。ご協力本当に有難うございます。

今回の例会では披露後の意見交換に花が咲き、大変楽しい句会となりました。嬉しい事です。そんな中、暁子さんより季重なりの話題が提供されました。「新涼の淵に繰り出す鵜飼船」を初め、随分良い句なのに季重なりである故入選から外した句会がいくつも有った。本当にそれで良いのかどうか、悩ましいところだ・・・と。本当に考えさせられますね。